

「Gastrointestinal Bleeding」

edited by Choichi Sugawa, Bernard M. Shuman, Carles E. Lucas

昭和大学藤が岡病院教授・消化器内科

藤 田 力 也

消化管出血に関する集大成の本と言えよう。歴史から現在まで、最近1991年までの豊富な文献を含んでいて、例えばショックについて病態・対応を整理するのにも好都合である。成因・病理・病態生理・診断はもちろん、出血に対する初療、小児における病因と対処から、放射線・内視鏡治療・外科治療まで包括されている。筆頭編者の須川暢一教授(Wayne State 大学外科)は小生の親友であり、昭和大学藤が丘病院外科の客員教授も勤めていただいている間柄であるので、特に興味をそそられ、あら捜しも兼ねて(?)一読した。

消化管出血は古くからの病態であるが、内視鏡・放射線診断学の発達によって、適切かつ迅速な処置が可能になったことは周知のとおりである。序文にもあるように“消化管出血の対処に当たっては、熟練した医師が集合して、病態生理を踏まえた

うえで、正確で迅速な決断が要求される”のであり、その decision making には多くの知識が裏打ちとして必要である。わが国では緊急内視鏡が普及し、内視鏡治療が普段に行われている。それに関する成書も少なくない。しかし、この本の章立てをみて驚くのは、その基礎知識にかなりのスペースが割かれていることである。病理では Dieulafoy's 潰瘍の概念をくわしく記載しており、angiodysplasia の項と共にその整理に役立った。内視鏡止血の項にクリッピングが含まれていないのが物足りなかったが、わが国から引用されるべき英文献が少なかったせいかと自己反省もさせられた。もう1つ気が付いたのは、わが国では一般化して用いられている AGML という略語にお目にかかれなかったことである。AGML は既に日本英語化してしまったのであろうか。胃炎については原因別に、例えば NSAIDs 胃

炎、SRMD (stress-related mucosal damage) などと表現されている。

編集者3名はデトロイトグループである。Lucas 教授はショックの研究者として有名であり、須川教授と共に同大学病院に勤務しており、Schuman 教授は以前デトロイトのフォード病院に在職され、須川教授との共著で消化器内視鏡の本を出版されたことがある。この3名のコンビの良さが、Chapter の作成に影響したのではなかろうか。内視鏡関係はもちろん須川教授が纏められたのであろう。項目がバランスよく配列されているので、内科、外科、小児科、救命救急科、あるいは専門外の医師にも利用できそうである。消化器内科・外科のレジデント医師には知識を深める意味で是非一読を薦めたい。

● 584 pp. 223 figs. 1992 ¥25,700

IGAKU-SHOIN Medical Publishers, Inc., New York (取り扱い医学書院洋書部 ☎03-3817-5670)